



# からだのとしょかん通信

病気について知りたいあなたに、分かりやすい医学情報を集めました。

外来棟2階の「からだのとしょかん」をご利用ください。娯楽書もあります。

## 2017年12月号

今号の内容は、放射線治療の目的、輸血療法、長期療養者への就職支援について紹介しています。

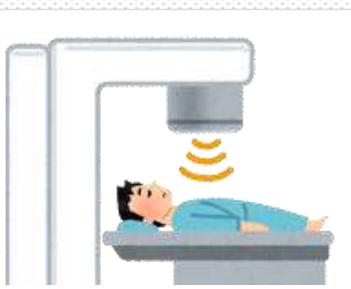
### ◆ 放射線治療の目的とは？

放射線治療科 鮎川文夫

約1200件。当院で昨年1年間に主治医の先生方から出された放射線治療の依頼件数です。件数が多いか少ないかは別として、主治医から届く放射線治療の依頼には、主治医の先生が組み立てる一人一人の患者さんの治療の流れの中で、「放射線治療を何のために行いたいのか」という内容が含まれています。1件毎に放射線治療の目的が存在しているのです。では、放射線治療の目的とはどのようなものでしょうか？

放射線治療には根治照射、術前照射、術後照射、対症照射…などの目的があります。私達放射線治療医は、主治医の先生からの依頼内容や患者さん一人一人の病気の経過から放射線治療の目的を明確にし、体力や病気の状態に合わせて、使用する放射線の種類、放射線治療の方法、照射範囲、照射する放射線の量や治療の回数などを決定（処方）します。主治医の先生からの放射線治療の依頼があっても、目的がはっきりしない場合や医学的に疑問が生じた場合には直接連絡をとり治療の目的を確認するようにしています。

次に治療の目的について説明していきましょう。完全に癌を治す目的で放射線を照射することを根治照射と呼んでいます。完全に癌を治すためですので、たくさんの放射線を癌に照射する必要があります。しかし、腫瘍の周囲にある正常組織に放射線の影響（放射線障害）が生じる可能性があるため、周囲の組織が耐えられるまでのギリギリの線量の照射を行うことになります。「一度放射線治療を行った同じ部位に2回目の放射線治療を行うことはできない。」と言われることがあるのは、周囲の組織が放射線に耐えられなくなる程度まで1回目の放射線治療で照射されているためです。



術前照射では手術を行う前に放射線治療を行い、腫瘍を縮小させて手術で完全に摘出できるようにします。また、術後照射は手術の後に再発予防の目的で照射を行ったり、手術で腫瘍を全部取ることができずに残った部分を放射線で治療することを言います。

残念ながら病気を完全に治すことはできないものの、痛み、息苦しさ、出血など苦痛の原因となる症状を改善し、生活の質を維持・改善するために行う放射線治療が対症照射と呼ばれているものです。骨に転移が生じると痛みや骨折の原因となることがありますし、脊髄と呼ばれる神経の束が骨転移により圧迫されると麻痺、しびれや排泄障害の原因になることもあります。骨転移に対する放射線治療では痛みは7割近くの人で改善されると言われています。ただし、放射線治療に即効性はなく、照射の効果が十分に出てくるまで約4週間かかると言われてしますので、痛み止めの薬と併せて放射線治療を行うことが多いです。このような状況から「放射線治療と痛み止めのお薬で治療開始前より痛みが和らげば成功です」と説明しています。

さて、初めの話に戻ります。約1200件（人数ではなく件数です）の依頼の中には一人の患者さんで1件目の癌に対する根治照射をした後で別の癌が見つかり、これに対する2件目の根治照射を行った方も含まれておりますし、また別の患者さんでは癌に対する1件目の根治照射をした後、経過をみていたら転移が出てきたためにこれに対する対症照射として2件目の治療を行った方も含まれているのです。昨年1年間で放射線治療科に依頼された治療の目的別の割合は根治照射が5割程度、対症照射が3-4割、術前・術後などの照射が1-2割となっています。苦痛症状を改善するための対症照射としても放射線治療が結構な割合で行われていることがわかります。

## 輸血療法ってなあに？ &lt;輸血検査室&gt;

輸血療法とは、出血や病気によって血液中の赤血球などの細胞成分や、出血を止めるための凝固因子などが足りなくなったときに、その成分を補充し症状を改善させることを目的としています。そして輸血用血液製剤は献血により作られており、善意ある方々によって支えられているのです。

## ■輸血用血液製剤の種類

- 赤血球製剤  
出血や赤血球が不足する状態や、機能が低下してしまい酸素欠乏のある場合に使用します。
- 血小板製剤  
血小板の減少や機能の低下によって、出血ないし出血傾向のある場合に使用します。
- 血漿製剤  
出血を止めるための凝固因子の不足によって、出血ないし出血傾向のある場合に使用します。

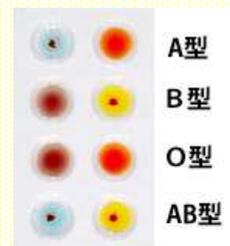


## ■輸血をするための検査

私たちの身体は自分の細胞ではないもの（非自己）を排除する働きを持っています。これを免疫反応といいます。他人の血液である血液製剤を輸血すると、免疫反応によって体内で赤血球が壊される副作用が起こることがあります。

検査室ではこの免疫反応をできる限り起こさせないように、輸血検査を実施しています。

- 血液型検査  
ABO 式血液型と、RhD 血液型を検査します。
- 不規則抗体検査  
Kidd(キッド)型、MNS 型といった ABO 式血液型以外の血液型が多く存在します。それらに対す免疫反応があるかを検査します。
- 交差適合試験  
実際に輸血する血液製剤と患者様の血液を混ぜ合わせて、免疫反応が起こらないことを確認する検査です。当院の輸血療法は血液製剤管理や輸血検査を実施し、患者様が「安全かつ安心」して輸血を受けられるよう、日々努めています。



## ◆ 長期療養者への就職支援について

## 地域連携・相談支援センター

国立がん研究センターがん対策情報センターの推計によると、日本人のおよそ 2 人に 1 人は生涯に 1 度はがんを体験すると言われていています。また、がん罹患患者数の全体の 3 割は、診断時の年齢が 20-64 歳となっており、3 人に 1 人は、いわゆる働く世代の方という状況があります。

そのような中で、厚生労働省により、ハローワークに「就職支援ナビゲーター」が配置され、がん等の疾病により長期にわたる治療のために転職や離職を余儀なくされた方へ専門職によるサポートが始まりました。

がんセンター新潟病院でもハローワーク新潟と連携し、平成 28 年度より就職支援ナビゲーターによる出張相談を毎週木曜日に開始し、職業相談や求人情報などの提供を行っています。個々の希望や治療状況を踏まえた職業紹介、希望する労働条件に応じた求人の開拓、就職後の職場定着などの支援を行っています。

また治療のために休業・休職されている方で、職場への復帰を希望される方へは「治療と職業生活の両立支援相談」を行っています。相談の希望があれば、職場で働く方々の健康の保持、増進を図る活動を行う「新潟産業保健総合支援センター」に所属する社会保険労務士の資格を持つ「両立支援促進員」の派遣を依頼し、当院にて出張相談を受けていただくことができます。治療スケジュールを考慮した働き方を相談しながら、希望に応じて会社との調整も行います。

新たな就職先を探していらっしゃる方や今の職場への復職の相談をご希望の方は当院の地域連携・相談支援センターまでご連絡いただければ、相談の予約をお取りしますので、お問い合わせください。